Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-09

A Corpus-Based Study of Linguistic Parallelism between Motion and Change-of-State Expressions in English: An Examination of Conceptual Parallelism

Ito, Akinori

(Degree)
博士（学術）

(Date of Degree)
2018-03-25

(Date of Publication)
2019-03-01

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲第7067号

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007067

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論　文　内　容　の　要　旨

論 文 題 目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

A Corpus-Based Study of Linguistic Parallelism between Motion and Change-of-State Expressions in English: An Examination of Conceptual Parallelism

（英語における移動表現と状態変化表現の言語的平行性に関するコーパス研究：概念的平行性の検討）

氏　　名　：　伊藤　彰規

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程社会動態専攻

指導教員氏名　（主）岸本　秀樹　　教授
（副）リチャード・ハリソン　教授
（副）菱川　英一　　教授

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

本論文は，英語における移動表現と状態変化表現の言語的平行性に関し，コーパスデータに基づいて検討したものである。移動表現と状態変化表現の言語的平行性とは (1) に例示される現象である。

(1)　a. 移動表現：

The bird **went from** the ground **to** the tree.

b. 状態変化表現：

The light **went from** green **to** red.

(1b) の状態変化表現において，(1a) で用いられているような移動動詞（*go*）や空間前置詞（*from, to*）が使用されている。このような言語的平行性はかねてから指摘されているが（Gruber 1965, Anderson 1971, Lyons 1977, Ikegami 1981, 他），近年，この言語的平行性を概念的平行性，すなわち我々の概念構造における移動事象と状態変化事象の理解の平行性によって捉える提案がなされている（Jackendoff 1983, 1990, Talmy 1991, 2000, Lakoff 1993）。本研究ではこのうち Talmy のイベント統合の類型論を理論的枠組みとし，イベントの言語化において，概念的平行性がどのように言語的平行性として現れるのかを検討する。

本論文の主張は以下の通りである。

(2)　a. 英語において，移動事象と状態変化事象の言語化という観点から見た時，移動表現と状態変化事象の言語的平行性が成立するのは一部のみである。つまり，移動事象と状態変化事象は多くの場合で異なる表現パターンによって言語化される。

b. 移動表現と状態変化表現の非平行性は，両事象の領域固有の特徴によって説明される。

c. 移動表現と状態変化表現の部分的な平行性を動機付けているのは，両事象のスキーマティックな構造の一致と，移動事象と共起する状態変化事象の存在である。

以下では第 1 章：序章と第 9 章：結論を除いた各章の要旨を述べていく。

第 2 章：本研究における課題

本章では，言語的平行性を概念的平行性によって説明している理論について解説し，本研究が取り組む課題について整理する。概念的平行性に基づいて状態変化表現との言語的平行性を捉えようとした時に課題になるのは，部分的な非平行性をどの

ように捉えるかという点である。先行研究では，同じく移動と平行するとされる他の表現（時間表現・所有表現など）において部分的な非平行性が見られ，この非平行性が各事象の領域固有の特徴によって生じる可能性が示唆されている（Jackendoff 1992, Iwata 1999, 他）。状態変化表現においても同様に領域固有の特徴が存在し，それが非平行性を生じさせる要因になる可能性がある。そこで，本章ではまず移動事象と状態変化事象の比較を行い，各事象がどのような領域固有の特徴を持ちうるかを整理する。その上で，本研究では次に示す研究課題を設定する。

(3) a. 移動表現と状態変化表現の言語的平行性はどの程度見られるのか？
b. どのような場合に状態変化表現と状態変化表現は平行的になるのか？
c. 非平行性は領域固有の特徴によって説明されうるのか？

本研究では上記の課題について，Talmy のイベント統合の類型論 (Talmy 1991, 2000) を理論的な枠組みとして検討していく。

第 3 章：先行研究と本研究での方法論

本章では，まず Talmy 類型論に基づく研究のうち，近年なされている Talmy 類型論の修正に関する研究を導入する (Matsumoto 2003, 2017)。その上で，Talmy 類型論が主張する平行性が実際に言語に現れているかを検討した研究を取り上げ，その問題点と課題を検討する。

また，本研究が方法論としてコーパスデータに基づくことを述べる。これは，先行研究における問題点の一つとして，データの代表性の問題があるためである。先行研究は小説から得られた限られた状態変化表現のデータに基づいているため，収集したデータがの代表性に疑問が残る。そこで本研究では British National Corpus (BNC) を用いてデータを収集した。BNC はイギリス英語のコーパスであり，様々なジャンルのイギリス英語を収録することで，イギリス英語を代表する形で設計されている。BNC を用いた検証を行うことで，上述の問題を解決できると考えられる。

第 4 章：移動表現のコーパス調査

本章では，BNC のデータを用いた移動表現のコーパス調査の結果を報告する。先行研究では，英語は主要部外表示型言語と分類されてきた（Talmy 1991, 2000, Matsumoto 1997, 他）。また，コーパスを用いた調査により，英語の移動表現において実際に主要部外表示型が主要であることが示されている（松本 2017）。しかし，近年の研究では，経路の種類によって表現パターンが異なる場合があることが指摘されている

(Matsumoto et al. 2013)。2 章で述べたように，状態変化表現と対応する移動表現の経路は限定されているため，その対応する経路を含む移動表現の表現パターンと状態変化表現を比較する必要がある。そのため，本研究では INTO の経路を表す移動表現を収集し，どのような表現パターンが観察されるかを調査した。本章では次の 4 つの観点から分析を行う。

(4) a. 経路の表現位置
b. 主動詞の表す意味
c. 文中における共イベント（様態や原因など）の表現率
d. 文中におけるダイクシスの表現率

コーパス調査の結果により示されたのは次の 4 点である。

(5) a. 経路の主要な表現位置は主要部外要素である。
b. 主動詞が表す主要な意味は様態・手段であり，客体移動表現では経路もある程度主動詞で表される。
c. 文中における共イベントの表現率は平均して 4 割程度である。
d. 文中におけるダイクシスの表現率は平均して 3 割程度である。

以降では，この移動表現の結果を状態変化表現のコーパス調査の結果と比較していく。

第 5 章：4 種類の状態変化事象表現のコーパス調査

本章では，BNC のデータを用いた状態変化表現のコーパス調査の結果を報告し，移動表現との差異を示す。本章では，分析の対象を 4 種類の状態変化事象とし，その事象を表現する代表的な言語要素をコーパスから収集し，表現パターンを調査した。結果は以下の 4 点にまとめられる。

(6) a. 状態変化の主要な表現位置は主要部である。
b. 主動詞が表す主要な意味は状態変化であり，様態や手段はほとんど主動詞で表現されない。
c. 文中の共イベントの表現率は非常に低く，そもそも状態変化表現では共イベントが表現されにくい傾向にある。
d. ダイクシス動詞は特定のイベントで頻度が高いが，直示的な意味合いは持たない。

以上の結果は，4章で示した移動表現の結果とは大きく異なるものである。この点から，Talmy類型論の想定する言語的な平行性は，何らかの要因により成立しないことを示すものである。ただし，幾つかのイベントでは移動と類似したパターンの頻度が相対的に高くなった。これらのイベントは移動と共起する状態変化事象であることを合わせて示す。

第6章：into状態変化表現のコーパス調査

前章では4つの状態変化事象の言語表現に関して調査を行ったが，それら以外の状態変化事象も調査を行う必要がある。本章では，調査対象を様々な状態変化事象に用いられる前置詞intoに絞り，より広範囲の状態変化表現において5章で見られたパターンが現れるかを検討した。その結果，第5章で示したパターンと類似したパターンが示された。この結果が示すのは，5章で見た4つの状態変化事象のみならず，状態変化表現一般において，移動表現と異なる表現パターンが用いられるということである。この点からも，Talmy類型論における言語的平行性が成立しないということが示された。

第7章：総合的考察

本章では，これまでのコーパス調査の結果に基づき，移動表現と状態変化表現の差異が見られる要因について，領域固有の特徴という観点から説明を行う。具体的には，経路と状態の遷移，様態，手段，原因，ダイクシスにおいて両イベントに差が見られるために，言語的平行性を完全に示さないということを主張する。一方で，部分的な平行性の動機づけに関しても検討し，(i) 移動事象と状態変化事象のスキーマティックな構造の一致，(ii) 移動事象と共起する状態変化事象の存在という異なる動機づけが関わることを主張する。また，これらの主張がもつ理論的な含意についても議論する。

第8章：通言語的考察とTalmy類型論の修正

本章では，本研究がこれまで提示してきた結論に加え，幾つかの言語が示す言語事実により，Talmyの類型論に関して修正が必要であることを議論し，仮説を提案する。具体的には，結果構文の類型論というTalmyの類型論とは異なる類型論の研究から得られた知見を紹介し，その類型論が示している結果が，本研究で示した英語における結果と関連性をもつことを示す。その上で，これら2つの類型論を統合する形で，状態変化事象は主要部表示型の表現パターンで表現されやすい傾向にあるという仮説を示す。この仮説はごく少数の言語から導き出されたものであり，これから経験的に検討されていくべき性質のものである。

［ 課程博士用 ］

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	伊藤　彰規
論 文 題 目	A Corpus-Based Study of Linguistic Parallelism between Motion and Change-of-State Expressions in English: An Examination of Conceptual Parallelism （英語における移動表現と状態変化表現の言語的平行性に関するコーパス研究：概念的平行性の検討）

要　　旨

本論文は，英語における空間移動と状態変化の表現に見られるとされる言語的な平行性について，コーパスデータに基づいて検討を行ったものである。この２種類の表現の平行性とは、The light went from green to redに見られるように、移動動詞や空間前置詞が状態変化を表す表現においても使われることに見ることができる。本論文はこの２種類の表現の平行性がどの程度まで見られるかを調査し、両者の平行性を主張するTalmyのイベント統合の類型論の修正を提案している。

以下、各章の内容と、その評価について述べる。

第１章の導入の後、第 2 章（Theoretical issues in conceptual and linguistic parallelism）では，言語的平行性を概念的平行性によって説明する諸理論について解説している。取り上げられているのは、Gruber, Ikegami, Jackendoff, Talmy らの研究で、重要なものは全て取り上げられている。それと同時に、平行性が部分的であるとする研究についても取り上げており(Iwata, Shinohara ら）、バランスの取れた議論が展開されている。第 3 章（Present study: Issues, framework, and methodology）では、まず、２章を受ける形で本論文の研究課題が示される。また、すでに提案されている Talmy 類型論の修正に関する議論が紹介され、本論文の枠組みが示される。また、コーパスを用いた計量的な研究手法を採用することが述べられている。健全な議論がなされているが、本論文では Talmy の枠組みを用いた研究を行っていると言うよりも、Talmy の主張の妥当性を論じているといった方が正しいと思われる。また、本研究で用いられている British National Corpus に関する詳しい説明と、それを採用した理由の明確化が不足している。続く第 4 章（Previous quantitative studies on English）では、英語の移動表現と状態変化表現に関する計量的研究を紹介し、それらの問題点を正しく指摘している。

第５章から８章は本論文における中心部分である。まず、第５章（Motion expressions in English: the INTO-path）では、著者による英語移動表現についてのコーパス分析の結果が示されている。INTO 経路の移動を表す言語表現について、a)経路の表現位置、b)主動詞の意味カテゴリー、c)様態・手段などのいわゆる共イベントの頻度、d)直示動詞の使用に関する結果が示されている。Talmy の主張していたこととは異なり、英語で主動詞の位置に様態が来る頻度は決して高くないことなどが指摘されていて興味深い。第６章(Encoding patterns in descriptions of four change-of-state events)では、同様の調査を、BREAKING, DYING, OPENING, EXTINGUISHING の４つの状態変化の言語表現に関して行っている。その中で、以下の点が主張される。a)状態変化の主な表現位置は主要部（主動詞）である；b)主動詞が表す主な意味は状態変化であり，様態や手段はその位置でほとんど表現されない；c)文中の共イベント（様態、使役手段）の表現率は非常に低く，状態変化表現では共イベントが表現されにくい傾向にある；d)ダイクシス動詞は特定のイベントで頻度が高いが，直示的な意味合いは持たない。ただし、４種類の状態変化のうち、EXTINGUISHING と OPENING の一部において、移動表現と似たパタンが見られたとしている。この章の内容は重要な発見を含んでおり、非常に興味深い。しかしながら、状態変化の種類によって表現パターンが異なるのであるから、この４つ以外の状態変化を調べたなら、異なる結果が得られる可能性もある。第７章(Encoding patterns in the *into*–change expressions)は、幅広い状態変化表現を検討するために、前置詞 into を伴う様々な状態変化表現を調査している。その結果，第６章で示したパターンと類似したパターンが示されたとしている。この章に関しては、前置詞句ではなく、形容詞句が結果句として現れる結果構文を調べたら同じ結果が出たかどうか、疑問は残る。

第８章（General discussion）では、上記の分析結果の意義が議論されている。その中で、コーパス調査の結果に基づいて分かった移動表現と状態変化表現の差異について，領域固有性という観点から説明を行っている。すなわち、移動と状態変化という概念領域において経路の特性の違いなどが見られ、それを言語表現が反映しているという見方である。一方で，一部平行的な場合の動機づけに関しても検討が行われ，（i）移動事象と状態変化事象の図式的な構造の一致，（ii）移動事象と共起して起こる状態変化事象の存在、という２つの動機づけがあると主張している。その上で Talmy 類型論の修正を提案している。さらに、英語以外の言語に関しても若干の通言語的考察を行っている。この章に関しては、部分的平行性の議論に独創性がある。その一方、領域固有の特徴として複数のものが挙げられており、どれが本質的なものかについての議論が欲しかったところである。また、通言語的考察は非常に簡略的な議論となっており、実質的に今後の課題として残されている。

全体として、内省にもとづいて行われてきた認知言語学的主張を、用法基盤の研究手法によって検証しようとしている本研究は、国際的な研究の流れの中でも重要な研究であると言える。また、コーパスに基づく言語記述と言語理論研究をつなぐものとして、関連分野の研究の発展に寄与する意欲的著作として高く評価できる。その一方、データの扱いにやや荒さが見られ、いくつかの点での説明不足もある。また、調査していない種類の状態変化の表現パターンや、英語以外の言語への適用など、いくつかの疑問点を残したままである。しかしながら、本論文の意味的類型論に関する大きな貢献からして、この論文が博士論文として優れた研究であることは疑いがない。

以上の理由から、本審査委員会は全会一致で、論文提出者　伊藤彰規　が、博士（学術）を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区 分	職 名	氏　　名	区 分	職 名	氏　　名
主 査	教授	岸本秀樹	副 査	教授	ハリソン
副 査	教授	松本曜	副 査	教授	石川慎一郎
副 査	准教授	田中真一			

主査記載 氏名・印	岸本　秀樹